

## 朱熹における「孝」の実例

松野敏之

「孝」は儒教の重要な特徴の一つであるが、宋代の道学においては相対的に低い位置づけにあったことが指摘されている。たとえば、朱熹（1130～1200）には『孝経刊誤』の著があるが、それは唐代までの孝と治世を結びつけるような大きな価値を認めたものではなく、個人の問題としてとらえなおそうとしたものである。朱熹の「孝」について先行研究では、『論語』の解釈をふまえながら仁との関係や、性情論における位置づけなどが明らかにされている。朱熹の「孝」は性情で言えば情となり、仁にいたる実践道徳としての端緒としてとらえられている。ただ孝が実践道徳であるのはよいとして、具体的にどのようなことを孝として想定しているのかということについては、自明のことに類するためかあまり論じられていないように感じられる。そのため、本発表では朱熹がどのような行為・心情を「孝」ととらえていたのかについて検討してみたい。朱熹における孝の位置づけが相対的に低くなっているとすれば、実践道徳とされる孝のとらえかたにも違いが見られるのか否かということでもある。

朱熹の孝に関わる重要な著述としては、おおむね同じ時期に編纂された『孝経刊誤』と『小学』がある。『小学』には五倫などに関わる経書の教えとその実践例を収めている。朱熹は『小学』にどのような実践例を収め、どのようなことを孝として想定していたのか。父母に対して向けられる孝の心情や行為は言うまでも無く、亡き父母や祖先に対する祭祀も孝として重視されている。さらに直接は父母に向けられなくとも、社会から父母が非難されないようにすることや、父母が愛する人や物への対処も孝の問題としている。『小学』などで示された具体例を通して、朱熹の想定する孝を考えてみたい。